

翻譯文章における言文一致について

——二葉亭初期翻譯文章の分析——

小 野 基

一

従来、二葉亭の翻譯「あひゞき」といった場合には、明治二十一年七・八月「國民之友」(第三卷)に發表されたものをさすようである。しかし、これとは別に、明治二十九年十月、単行本「片恋」におさめられた同じ作品がある。実は後者は「片恋」の凡例によると、「旧稿に添削を加へたるもの」で、前者とはかなり文章を変えている。今仮りに前者を旧訳、後者を改訳と呼んでおく。

ところで、かつて大久保忠利氏が、この両者の用語について論じ、^(註)その際、中村光夫氏の評論をとりあげて二者比較の問題点を出されたことがある。大久保氏は、中村氏のことばを次のように引用し、
青春の夢から醒めてゐた訳者がかつての直訳体の生硬さを嫌つて、これを日本語として熟したものにしようとした試みと思はれます。しかし、この初出の訳文と改訂以後のものとどちらがす

れてゐるか、問題は、前者の方が今日の文章感覚には、むしろ近いやうに思はれます。^(註)(傍点大久保氏)
これに対して、

『どちらがすぐれているかは問題』『前者の方が今日の文章感覚には——近い』という氏のコトバは、「前者の方がすぐれている」と断言はしないまでも、後の方が「すぐれている」と断言しないことは確かです。氏のコトバジリをとらえるわけではないがこうしたことにアイマイさを示すということは、どうも文芸批評家としては許されぬようにには思える。いや、むしろ、もし前の方が近いと言われる「今日の文章感覚」なるものを、どうしてもブチコワサなければならぬと、ぼくには思われる。』
とのべ、更に「実例で対決させよう」といって、旧訳と改訳の用語例を一部対照させている。一体に文章がすぐれているとか、いない

とかいう価値判断は、その規準をどこにおくかによってかなり異なり、その規準なるものも、文章に接する態度なり目的なりによって相違するはずである。しかしまた、それがいづれにせよ、ある文章のどの事実が新しいのかどの事実がすぐれているのかということについては厳密には教えてくれないものである。大久保氏の説明も、中村氏に対して、「今日の文章感覚なるものをこわさねばならぬ」といったほど、それをこわすための方法は与えてくれないように思える。ただ、漢語がこなれているということと、明治二十年前後の「言文一致」は、文章では、西鶴張りの雅俗折衷体から「話しことば」を土台とした文章へのうつりかわりであったという解説的な結論を出すに止まっている。

「あひゞき」の旧訳と改訳との間には八年のへだたりがある。いずれも、従来の明治文章史における時代区分、湯池孝氏の「中期（20年前後～30年代）」、島方泰助氏の「第二期（20年前後～30年前後）」に含まれる。更に山本正秀氏の区分では、旧訳が言文一致成立の「第一自覚期」、改訳が「第二自覚期」に含まれ、いわゆる近代文章成立の過程的な期間に入れられる。詳しくは、旧訳が「浮雲」第三編の執筆中に出され、二葉亭の初期言文一致の試みの期間中には入るに對し、改訳は尾崎紅葉の「多情多恨」をはじめとする一連の言文一致作品が一般化しはじめた頃のものであり、その間の八年間は必ずしも順調な近代文章發展期間であったとはみられていない。したがって、「あひゞき」の旧訳と改訳のもつ意味も単純に新古優劣の關係では割り切れない複雑なものがあると考えねばならぬ。

今は近代文章成立過程の一面として、「あひゞき」の文章事実を

とらえ、その文章史的意義を認めるための方法を求めてみたいと思ふ。

二

考察の中心となる対象は、「あひゞき」の旧訳改訳とも、冒頭から全体の三分の一にあたる地文とする。

まず兩者を文の長さについて比較するために、句読点、字数等を調べてみると次のようになる。

米川訳	改訳	旧訳	句点	読点	中間点	字数	一文の字数
66	35	47					
152	147	172					
	6						
3569	3111	3514					
54字	88字	76字					

句点と句点の間の文を今一文と考えると、旧訳が47文、改訳が35文となり、12文の差がみえる。兩者の各文を対照させていくと、意訳直訳の差を除いては叙述の欠けた部分や省略された部分はないので、この文数の差異の原因は別のところに求められねばならない。句点が改訳において12個も減少していることは明らかに旧訳のいづれか二文が改訳で一文につきまき合わされているわけで、この場合二つの型がみられる。一つは、旧訳で句点であったものが、改訳で読点となり次の文につながる場合、

(A) 自分は座して、回顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。

(旧訳 第四文、第五文)

(A') 自分は坐つて、四方を懸望して、耳を傾けてみると、つい頭の上で木の葉が微に戦いでゐたがそれを聞いたばかりでも時節は知れた。(改訳 第四文)

(B) 廿歩ばかりあなたに、物思はし気に頭を垂れ、力なきさうに両の手を膝に落して、端然と坐してゐた。旁々の手を見れば、半ばむき出しで、その上に載せた草花の束ねが呼吸をするたびに縞のベチコートの上をしづかにころがってゐた。(旧訳 第二十二文、第二十三文)

(B') 廿歩ばかり彼方に、物思はし気に首を垂れて、両手を膝に落して、片々の手を半分啓けて大きな草花の束を握と持つてゐたが、花束は呼吸をする毎に段々滑つて縞の袴の上へ落ちかゝつてゐる。(改訳 第十七文)

このような部分が6ヶ所見える。もう一つの場合は、旧訳で句点であつたものが、改訳では特殊な中間点「、」(白点)となつてゐる場合、

(A) この少女なか／＼の美人で、象牙をも欺むく色白の額際で巾の狭い緋の扶額を締めてゐたが、その下から美しい鶉色で、加之も白く光る濃い頭髪を叮嚀に梳したのがこぼれ出て、二ツの半圓を描いて、左右に別れてゐた。顔の他の部分は日に焼けてはゐるが、

薄皮だけに却て見所が有つた。(旧訳第二十五文、第二十六文)
なか／＼の器量好で、象牙のやうな色白の額際で幅の狭い緋の巾を巻いて、その下から美しい灰色の白っぽい濃い髪の毛の叮嚀に梳したのを少し見せて、二ツの半圓を描かせて、左右に分けてゐる。(白点) 顔の他の部分は日を受けて黄ろい黠をほんのりと

見せてゐたがこんな色は薄皮の者でなければ見られぬもので。(改訳 第十八文)

(B) 眼ざしは分らなかつた、——始終下目のみ使つてゐたからで、シカンその代り秀でた細眉と長い睫毛とは明かに見られた。睫毛はうるんでゐて、旁々の頬にも亦蒼ざめた唇へかけて、涙の傳つた痕が夕日にはえてアリ／＼と見えた。(旧訳 第二十七文)

(B') 伏目になつて居たから、眼は見えなかつたが、その代り秀でた細い眉と長い睫毛は判然見えた。(白点) 睫毛は濡んでゐて、片々の頬にも蒼ざめた唇へ掛けて涙の傳つた痕が夕日を受けてきら／＼と見える。(改訳第十九文)

このような部分が6ヶ所見える。この中間点(仮りにそう呼んでおく)は旧訳では全くみられなかつたもので、二葉亭作品では「あひざき」の改訳に19個と「めぐりあひ」(奇遇)の改訳に55個あらわれるだけである。総じて二葉亭作品にみられる句読点のおき方は、現在の我々が考える方式からいうと、無規律な感じを与えるのだが、この中間点の性格も、きわめてあいまいな使われ方をしている。さきの8例についてみると、中間点で止められる最終の語は、動詞の終止形及び「た」終止がほとんどで、機能は句点の場合とは同等のように思われる。しかしまた、場合によっては、少数ながら、

○「お早う／＼」とまた云つて、(白点)「老爺は如何した?」

○「……さういふ方には他人の同感が必要なんぞでせうが、(白点)私は何人にも同感して戴きたくない、(白点)」

のように読点に近いものもある。今、この中間点6例をさきの表中、句点の35に加えれば旧訳の句点数に近くなるが、一概に句点の

差異をもたらしたものがこの中間点であるともいえない面がある。いずれにしても、改訳の一文は旧訳に比して長くなっており、全体の字数は改訳で相当減少していることがわかる（但し、中間点を句点に加えた場合には、一文は改訳の方が短くなる）因みに、新潮文庫米川正夫訳の「あひゞき」をみると、この部分が66文で、一文あたりの字数は極端に短かくなっている。一方、読点の数については、二葉亭の訳では、旧訳⁽²⁾と改訳⁽³⁾との差異は句点の場合とほぼ似かよっている。このような差異は明らかに、それぞれの文章自体が、言文一致の展開の面でかなりの変化をみせているものとして受けとることがきよう。

ところで、二葉亭の句読点のつけ方が、現代の方式からみると無規律だと思われることについては、これを逆に考えれば、彼の「訳の標準」を実践したものとして注目される。二葉亭はこれについて、最初は意味よりは、原文の音調に重きをおいて訳訳するようにとめたとのべ、

「コンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず原文にコンマが三つピリオドが一つあれば訳文にもピリオドが一つ、コンマが三つという風にして原文の調子を移さうとした。」

「訳訳を始めた頃は、語数も原文と同じくし形を崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として形の上面に大変苦勞した。」

と語っている。^(注)「訳訳を始めた頃」は勿論旧訳の頃をさすが、この「標準」が必ずしも旧訳だけに及んでいるものとは思われない。あとで、「其後とても長く形の上には、此の方針を取ってをった。」

とのべていることから考えると、むしろ改訳をもこの線上にのせて考えたほうが良いように思われる。彼の「標準」によれば、外国文を訳訳する場合には、ことばや文章の正確を期す前に「音調」を重んじたわけである。これが彼の言う「形の上の標準」ということになる。少なくとも「あひゞき」や「めぐりあひ」に関する限り、句読点の問題は、この「標準」を無視して考えることはできない。改訳にみる句読点の数の変化も、この「欧文の一特質」としての「音調」を忠実に移入するという態度に基づいて更に改良を加えた結果があらわれたものと考えるのが正しかろうと思う。この態度は後述の語彙の変化にも関連がある。さて、このような態度で音調をひき移した言文一致文の構造は、さきの句点が読点に変わる例でみると、

- (A) — て、 — た。 — が、 — た。
 (A') — て、 — と、 — が — た。
 (B) — に、 — 運用中止、 — て、 — た。 — ば、 — で、 — た。
 (B') — に、 — て、 — て、 — が、 — た。

のように、読点による句と句の連結の形は、きわめて多くの場合が接続助詞「て」「が」などによってなされている。そして、この形は極端な場合、

○少女はそなたを注視して、俄にハッと顔を赧らめて、我も仕合とおもひ顔にニコリ笑って、起ち上らうとして、フトまた萎れて、蒼きめて、どぎまぎして、——先の男が傍に来て立ち留つてから、漸くおづ／＼頭を擡げて、念ずるやうに其の顔を視詰め

た。(旧訳 第三十九文)

○待合せてゐた例の少女の姿を見た時から、モウ様子を賣り出して、ノソリ〜と大股にあるいて傍へ寄りて、立ち止って、肩をゆすって、両手を外套のかくしへ押し入れて、気の無さうな眼を走らしてデロリと少女の顔を見流して、そして下に居た。(旧訳 第四十六文)

のように、何度となくくり返し、連続する。この形は改訳においてもほとんど変わっていない。むしろ、旧訳では、二文によって一度脈絡を切っている形になっているものを、改訳ではこれを接続助詞で連結して、大きく総括的な一場面を提示する一文に変えている場合が多い。この連結の仕方は二葉亭のいう「音調」と無関係ではない。二葉亭自身はむしろこれを欧文脈の移入と考えて強調した感がある。

次に、言文一致の創始期においてつねに問題とされた、句点の終止部について両者のあらわれ方を調べてみたい。

米川訳	改訳	旧訳	た	で	である	であった	現在終止名詞	副詞	文語め	計
23	9	35	3	0	3	0	2	1	3	47
0	4	3	0	0	0	0	0	0	3	3
11	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	3	0	0	0	0	0	0	3	3
20	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0
66	35	47	3	0	3	0	2	1	3	47

右の表でみると、旧訳の終止部は、ほぼ70%が「た」終止で占められている。これに対し改訳では動詞現在終止が約40%で一番多い。したがって終止部は大きな差異をみせている。旧訳から改訳へ

の変わり方の場合、各終止語ごとに次の五つがとりだせる。

イ、木末を伝った。(旧)
木末を吹いて通る。(改)

ロ、気まぐれな空ら合ひ。(旧)
気紛れな空合である。(改)

ハ、眼障りにはならなかつた程で。(旧)
眼障りにもならぬ。(改)

ニ、男の姿がチラリ。(旧)
男の姿が隠れるのを視て、……(改)

ホ、前触れをするかと思はれた。(旧)
此様な前触があるもので。(改)

右はそれぞれ、(イ)「た」終止から現在終止へ、(ロ)名詞止から「で」ある「終止へ、(ハ)「で」終止から現在終止(文語助動詞)へ、(ニ)副詞止から終止語消滅、(ロ)「た」終止から「で」終止へ変化している場合である。これらの変化の中で、旧訳の名詞止、副詞止が消えているのに対し、新たに「である」終止が現われているのが注目される。一般に名詞止、副詞止は江戸末期からの古いものを受けついで言文一致文の初期の形である。「である」終止は逆に新しい形である。旧訳と同時期の「浮雲」で多くみられた名詞止、副詞止が「あひびき」では、両訳を含めて減少していることは、翻譯の場合、新しい終止語が要求されたことでもある。しかも、その旧訳と改訳において終止語の範囲が大きく異なっていることは、作者が翻譯文章をまず日本文章として成りたせようという意識のもとに作りあげたからだともいえる。改訳における終止語は、米川訳とほぼ似かよった領域を示している。ただ「で」終止については、旧訳よりも改訳が多く

なっている。これは、二葉亭の場合、この作品に限らず、全作品を通じてみられるもので、必ずしも別の終止語へ変化するものとしてはみられない。右の例(例のごとく、「た」終止から「で」終止へ変わっている場合もきわめて多く、二葉亭としては、むしろ好んで使用したという感じをうける。総じて、改訳にみえる終止語は、旧訳とはかなりその領域を異にすると同時に、一方的な使われ方から分散の様相をみせている。したがって、少なくとも終止語に関する限り、改訳においては、「た終止」「である終止」「現在終止」の三形を代表として、使われ方にはばバランスを保った変化のある表現形式をもつ言文一致文として受けとれそうである。

三

一つの原作品について、時期をたがえてなされた二つの訳文においてこのような差異がみられることは、もちろん訳者の文章意識の変動として受けとらねばならない。諷刺という限界の中において、これがどの程度実行されているかを、更に二つの訳の語彙調査からぞいてみたい。同一原文から得る訳文ということになれば、語彙の意義分野には大きな変動を予想することはできないようにみえる。果してそうなのかどうか。今、便宜上品詞別語彙分野における数を比較してみると次のようになる。

旧	訳	名詞動詞形容詞副詞連体詞接統詞													
		延べ語数	延べ語数	延べ語数	延べ語数	延べ語数	延べ語数	延べ語数							
異なり語数	異なり語数	259	384	224	321	41	59	44	49	78	102	6	24	14	25

右の7種の各品詞別語彙からみたところでは、全体に、延べ語数、異なり語数とも形容詞をのぞいて改訳の方が少ない数字を示していることがわかる。これはちよつと、さきの句読点、字数の差異の方向と一致しているわけである。この現象は、実際に文章を比較した場合に、よりはっきりと確認できる。

改	訳	延べ語数	延べ語数
異なり語数	異なり語数	異なり語数	異なり語数
247	201	352	313
46	33	63	39
67	11	90	28
10		12	

(A) 小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するやうにパラ／＼と降って通った。(旧訳 第十文)

(小雨が音のせぬやうに、忍んで、ばら／＼と降出す。)(改訳 第七文)

(こつそりと人を出しぬき顔に、細かい霧雨が節で濾したやうに落ちて来て、さゝやきの音を立てる。)(米川訳 第十三文)

(B) まことに柔和でしとやかで、取繕ろつた気色は微塵もなく、さも憂はしさうで、そしてまた愛度気なく途方に暮れた趣きも有つた。(旧訳 第三十文)

(海に柔和で微塵も厭味気がなく、さも物憂さうで、何か悲しい事に出合つて邪気なく途方に暮れた気味が溢れるばかりである。)(改訳 第二十一文)

(少しも気取つたところがなく、眞まじしやかで、さも／＼悲しさうであるが、その悲しみがよく合點のゆかないやうな、子供らしい頼りなさが一杯に溢れてゐる。)(米川訳 第四十一文)

今、(A)の文について、ロシア語の原文をもつともよく移したものと

いわれる、コンスタンス・ガーネットの英訳を引いてみると

And silly, stealthily there began drizzling and whispering through the wood the finest rain.

旧訳がいかにも原文に忠実であるかは明らかである。二葉亭のこういう翻譯態度についてはすでに指摘し尽された感があるから、論及の余地はないと思う。ただ、その厳密さにおいて旧訳と改訳との間に差があるとするれば、これが右の語彙状況にも当然反映しているわけである。

右の表を更に細かく見ると、各語彙間で、旧改訳の語数の比率、使用率がほぼ共通している中で、形容詞と接続詞がやや趣きを異にしているのがわかる。すなわち、形容詞語彙はその語数の面で、他の語彙とは逆に改訳において多い数を示している。両者の形容詞を小分野ごとに比較してみると、

(旧訳)

1、〔色彩〕

白い、赤い、黄ろい、青い、

薄白い

2、〔客観的性状〕

あわあわしい、長たらしい、

愛度気ない、あらげない

3、〔判断的性状〕

美しい、勇ましい、やさしい、

すさまじい、薄きたない、

愛らしい

4、〔感覚的感情的性状〕

目ばゆい、うるさい、

涼しい、

快よい、

5、〔程度〕

著しい、能い

敵しい

高い、低い、短い、厚い、大

い、

遠い、濃い、

右は全部の形容詞ではないが、両者で共通している語は、異なる語数全体の半分にも満たない。そして、全般にどの分野でも、改訳では新しい語がみえる。旧訳がより逐語訳に近く厳密であれば、語彙量や語数もある程度限定されていると思われる。形容詞だけを見ていると、改訳のほうがはるかに自由なことばの使い方をしているといえる。が実際は、形容詞以外の語彙では、この限定された語数に関する限り旧訳がはるかに多い。したがってこの形容詞語彙の現象は、別の観点から説明する必要がある。

○^{さか}格柄し気に見える人の眼の如くに(旧)

(美しい利口さうな眼のやうに)(改)

○みごとな莖(旧)

(美しい長い莖)(改)

○薄きたない圓葉(旧)

(圓い小汚ない葉)(改)

○滑らかな白の表衣(旧)

目ばゆい、うるさい、涼しい

心地の好い、冷たい、生温い、

人臭い、忌々しい、詰らない

著しい、熟い

高い、低い、短い、厚い、大

きい、

細い、長い、薄い、狭い、早

い、はてしない、同じ

(改訳)

赤い、青い、黄ろい、

薄青い、白っぽい

あどけ
邪気ない、円い

美しい、勇ましい、柔しい

小汚ない、洒落くさい、故と

らしい、耐力の無い

(清潔な短い白襦袢) (改)

○何處となく止度氣ないのを飾る氣味 (旧)

(洒落くさい止度氣ない風) (改)

つまり、改訳では、文の修飾関係で、形容詞ト形容詞ないしは、形容動詞ト形容詞の形を頻繁に使っているのがめだっている。このために形容詞は多く使われることになる。ここで、さきの「余が翻譯の標準」を思い出す。二葉亭は、訳文に音調を重んずるためにコマ・ピリオドを原文どおりに移すという方法以外に、もう一つのことを実行している。それは、「強く敵しく彼を責めた」という類の、「重複した餘計のことを云ふ」ことである。彼によると、「音調の関係からして、副詞を入れたいから入れたたり、二つで充分に足りる形容詞を、も一つ加へて三つとしたりするのである。」ということになる。原文の意味を忠実にひきうつす前に、「音調」を移そうとして、場合によっては、語彙でいえば同一分野には入ることばを書き加えるという態度をとっているわけである。従って、この形容詞語彙の問題は、訳者のこの態度のあらわれとしてうけとれ、改訳においてさらにこれをおしすすめたものであることがわかる。

次に、接続詞については、旧改訳の語数に大きなひらきをもってあること、使用率が両者で極端に異なっている点が他の語彙とちがっている。旧訳の語彙は、

そして、また、或は、加之も、が、只、さもなくば、そこで、さ
て、兎に角、シカシ、かうして、または、

等かかなりの種類をもっているのに対し、改訳では、
さもなくば、兎に角、尤も、そこで、かうして、或は、又は、

で、と、

がほとんど一回限りの使用に終わっている。改訳で、「しかも」「そして」「また」「しかし」等の接続詞が消えていることは、この部分がほとんど接続助詞に変わっているためである。つまり、この接続詞語彙の問題は、前述の句読点の教と密接な関係をもっているわけである。

その他両者の語彙のうち、

座して、念ずるやうに、傍へ寄りて、(旧)

などの文語表現語彙が、

座って、拜むやうに、傍へ来て、(改)

と口語表現に変わっていることや、漢語語彙において、

光沢、無言、抱襟する、潤歩(旧)

などの漢語がそれぞれ

色、黙って、癡癡って、急足(改)

のようにこなれた日常語や、ふりがなの助けによる平易な表現に改められていることはすでに指摘されている。ただ、平易とはいってもふりがなをとった場合、実際には漢語の量が改訳において少なくなっているわけではない。かえってふりがなによる二重表現の漢語は増加している。特に、

燦爛と、凛然と、嫵然して、狼狽して(改)

などの形容語は、旧訳では

あかみわたって、ブル／＼と、ニッコリ笑って、どきまぎして
(旧)

のように漢語を使わなかったものである。筆者は、二葉亭の言う「漢語の中でも、日本語として一般化していないものは使わない」

という規準は、このふりがなを無視した場合には成り立たないと考
えている。このような表記をすることによって、それに一つの表現
価値を与えようとする傾向は明治の文章に根深くしみ込んでい
るが、けっきょく、改訳もこの流れにおし流されて言文一致としての
発展の限界を示したようである。

四

以上、二三の観点から「あひゞき」の文章を分析してみたが、こ
れによって、表題の翻譯にみる言文一致が二葉亭の場合、どのよう
な性格であるかが究明されたようには思えない。むしろ、一つの文
章の展開が一口には性格づけられないさまざまな問題をはらんでい
るということを痛感するばかりである。大久保氏のように、一概に
「あひゞき」の改訳が旧訳に比して言文一致として優れているとい
う方向にも結論づけられない。しかし、二葉亭が本来、なぜ改訳を
試みたのかということを考えるとき、そこに二葉亭の背負わされた
明治文章の流れ、問題がのぞかれるようである。

言文一致による翻譯文章を考察することは同時に、欧文脈が言文
一致文ないしは口語文にどのように浸透していったかを考察するこ
ともあると思う。そのためには原文との対照はもちろんのこと、
文章分析のさまざまな方法が必要である。それを求めつつ、明治文
章、ひいては近代文章の流れを究明するのが我々の方向であらうと
思う。

(昭和三十七年十月)

(注) (1) 岩波講座「文学」第八卷

(2) 河出書房 現代文藝名作全集「二葉亭四迷」の解説

(3) 「国語と国文学」第七卷第四号「明治時代の文章相」

(4) 「明治小説論」

(5) 「明治大正文学研究」第十一号「言文一致の変遷」

(6) 「余が翻譯の標準」(岩波 四迷全集第九卷)

(7) 「余が言文一致の由来」()

(広島県福山誠之館高等学校教諭)